水中都市
デンドロカカリヤ

安部公房

新潮文

デンドロカカリヤ

定価280円

新潮文庫 草121 G

昭和四十八年七月三十日 発行
昭和五十六年十一月三十日 十四刷

著者 安部公房

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社
郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部(〇三)(二六六)五一一一
編集部(〇三)(二六六)五四四〇
振替東京四一八〇八番

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

㊐ 印刷・二光印刷株式会社 製本・株式会社植木製本所
© Kôbô Abe 1973 Printed in Japan

新潮文庫

水中都市
デンドロカカリヤ

新潮社版

2136

目次

デンドロカカリヤ……七
手……三五
飢えた皮膚……四五
詩人の生涯……六七
空中楼閣……八三
闖入者……一〇七
ノアの方舟……一四五
プルートーのわな……一六五
水中都市……一七三

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

鉄砲屋……二〇九
イソップの裁判……二五一
解説　ドナルド・キーン

水中都市・デンドロカカリヤ

デンドロカカリヤ

コモン君がデンドロカカリヤになった話。

ある日、コモン君は何気なく路端の石を蹴とばしてみた。春先、路は黒々と湿っていた。石は、石炭殻のようにひからびたこぶし大の目立たぬものだったが、何故蹴ってみようなどという気になったのだろう。ふと、その一見あたりまえなことが、如何にも奇妙に思われはじめた。

分るだろう。誰だってそんな憶えがあるにちがいない。思わずあたりを見まわして、他の人もそんなことをするものかどうか、そっと確かめてみたりする。確証がなくても、なに、誰だって知らず知らずのうちにしているのさと、後味の悪い独り合点をしたとたん、二、三歩先にころげていった石ころを、こんどは別な足が蹴っていた。どこかへ引きさらわれてゆく感じ、おれの心はそんなに空っぽなんだろうか、そう思ったその時なんだ。コモン君はふと心の中で何か植物みたいなものが生えてくるのを感じた。ひどく悩ましい生理的な墜落感。不快だったが心持良くもある。地球が鳴りだした。ぐらぐらっとしたとたん……まったく変なのさ、コモン君は急に地球の引力を知覚したんだ。奇妙じゃないか、引力を感じたんだよ。ぎゅっと地面に引止められた。まるで地球にはりついたよう……いや、事実はりついたんだ。ふと俯向いて、愕然とした。足が

見事に地面にめり込んでいる。なんと、植物になっているんだ！　ぐにゃぐにゃした細い、緑褐色の、木とも草ともつかぬ変形。

それから、あたりが真暗になった。その暗がりの中に、夜汽車の窓にうつったような、自分の顔が見えた。むろん錯覚さ。なんの錯覚かって、コモン君の顔は裏返しになっていたんだ。あわてて顔をはぎとり、もとに戻した。瞬間、すべてはもとどおりになっていた。

急いで歩き出し、もし誰にも見られていなかったら何食わぬ顔でと、見まわすとやはり気のせいかこちらをじろじろ見ているやつがいる。慌てて、二、三歩行ったところでまたつまずいたようなふり、それが如何にも靴のせいなんだといわんばっかりに俯向いてみせたりしながら、きっとこれでごまかされてしまうだろう。錯覚だったと思うにちがいあるまい、などと、そのことはもう考えないことにして……。

それからまる一年何事も起らなかった。コモン君も初めは不安だったが、そろそろ忘れようとしはじめていた。自分でも錯覚だったように思われるのさ。ところが一年たった翌年、やっぱり春のことだった。突然またその病気が再発してしまったんだ。

ある日コモン君はこんな手紙を受取った。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

あなたが必要です。それがあなたの運命です。
明日の三時に、カンランで……
Kより

一目で分る、女文字である。叫び出しそうになる胸をぐっとおさえて、コモン君は考えたよ。K……、はて、誰だったろう？　分るようで、分らない。まったく見当がつかないのに、よく知っているような気もする。考えるうちに、暗示にかかってしまった。Kという名の恋人が、たしかに居たような気がしてくるのだ。その手紙を、折目が変らぬよう注意深くもと通りにたたみ、封筒にかえすと、両手の掌（てのひら）の間にぴったりとはさんで、じっと立ちつくした。手のひらが、眼になり、耳になり、鼻になり、口になり、しまいに手紙の中に融込（とけこ）んでゆくみたいだ。その封筒を注意深く二つに折って、内ポケットにしまった。彼の眼は手紙の文面より先を見てはいなかったし、後も見てはいなかった。そこにあるだけのことで、申分ない気持だった。

ところで、夜が明けた。一晩中ひどい風雨が窓を打っていたが、晴れていた。まだちょっと早かったが、一時過ぎ、アパートを出た。振返って、部屋の窓ガラスの割目の魚の形と、何んのために使ったのか軒に下っている腐った縄（なわ）とを想出にとどめてから、びちょびちょと黒くしめった

道の、それでもところどころまだらに残ったアスファルトの部分を選んで踏んでゆく。はっきり事態をたしかめておきたかった。たとえコモン君の場合でなくたって、いささかの感動もなかったなどと言えるだろうか？　風が這ってたよ。コモン君は肩で息をしていた。

珈琲舗、カンラン。

それが目的の店だった。

コーヒーを一杯、それに浮立つ心に合わせてピーナッツを一袋。通りの見える窓ぎわの片隅に腰掛けて、様々な想いを心の中に解き放つ。なんという突然だったろう。心のどこかで願ってはいたかもしれぬ、けれど、気づかないということは、なんていう恐ろしいことだろう。おれは多分そのKという娘と、この机を前に向い合って、時おり、理解されない愛の訴えなどを静かに聞いていたんだ。しらずしらずに、今日という日が用意されていたんだ。素晴らしい、素晴らしいと心の中で繰返して見る。今になってみれば、こんなこともずっと前から予期されていたことなんだと、そんな気持になっても別段の不思議もなさそうに思われる。待っていたんだと、自分に言いきかせても一向に不都合ではない。こうなるべきだったんだ。コモン君は人目につくほど、独り笑いをもらしてしまう。

そんなとき、なんでも物が大きく見えるのだろうか、まるで虫眼鏡をあてたようなのさ。椅子の八割を占めたお客の顔の、鼻のわきの黒子や、耳の下のいぼや、半かけの金歯や、長くのびた

鼻毛が変に目立つんだ。ジャケツの男の指輪の鍍金がはげていた。セーラーの襟を広くはだけた女学生のスカートの前に褐色の小さな汚点がついていた。顎の肉がカラーを押しつぶしてる、中年男の肘の下の机に、誰が刻んだのか矢のささったハートがのぞいていた。黄色い頬のとがった学生が激しい弁舌をふるっている前で、目の小さな肥った娘が、しきりに顔にかかる唾をぬぐっていた。その足元の、恐らくどんな視線も行ったことがないにちがいない、処女地のような壁ぎわに、小さな穴が開いていて、ねずみがそっとこちらをうかがっているらしい様子、床は水を打ってあり、ほこりが白くふけのように浮いていた。

コモン君は全部にすっかり満足して、視線に飽和した部屋の中から押出されるように外を見ると、省線の駅に近いにぎやかなアスファルトの道は、もう白く乾いて、混り合う影までが白っぽく乾いて浮いていた。

自動車が並んで、その乾いた影を粉々に砕き、吹上げて走り去る。

二時十分。

ドアのところにねじ飴のようにつっ立った大男……。ジロリとコモン君をにらむ。コモン君は首のあたりの蝶番が外れてぐっと二つ折れになり、眼球と心臓とがぴったり合わさったように思った。

まさか！

いや、大男と思ったのは、逆光線のための錯覚で、しかしむろん少女などではない、黒い詰襟、厚ぼったい眼鏡をかけた、ずんぐり男だ。巾があるくせに凸凹の多い、歪んだ顔。薄っぺらでつ、ややかな鼻を中心に、右側全体がつり上って、ことに右の眼は、眼鏡の奥に空洞のように広がっている。細い左眼で吸いよせ、右眼で飲みこんでしまう、そんな眼。こめかみのところには、事があればいも虫のように動きだすにちがいない筋が腫物みたいに浮出ている。

（Kなんだろうか？）……まさか！　ところでそいつはぐるっとひとあたり見廻すと、まるでちゃんと予定してでもあったように、たった二足で、コモン君の前に掛けちゃった。びっくりしたよ。思わず腰を浮かせ、何か言おうとすると、じろっとにらむじゃないか。コモン君は、椅子の具合をなおしたんだと、そんな素振でごまかすよりほかなかった。どうしたらいいだろう？　こんな男がKであろうはずがない。あんなやさしい字を書くわけがない。そうとも、Kはおれの恋人、美しい少女でないはずがない。畜生、なんだってそんな所に坐るんだ。それとも……と、やや不安になって考える。こいつ、K嬢のことを知っていて、妨害に来たかな。そう思うと、気が気でなくなった。K嬢が店に入ってくる前に、なんとか連絡する工夫はないものだろうか。今から駅の前に行って待っていてみようか。しかし、万一バスでやって来たらどうしよう、向うのタバコ屋の角で見張っていようか、だが裏口のほうから来たらどうしよう……。そろそろ落着をなくしかけた鼓動に合わせて、頭の上の柱時計の廻転までが目に見えて早くなる。時間が、指の間からこぼれ落ちる砂のように感じられる。

気圧のような圧迫を、追いはらうように、顔を上げた。やつは、空洞のほうの片目で、コモン君の眼を、腹の中まで見すかすようにのぞきこんでいた。何から何まで知り抜いているといった顔つき……コモン君も、そうかもしれないと思った。いや、そんなはずはない、俺の顔だって知るはずがないじゃないかと、一応は何処かで打消しても、すぐ別なところで相手がすべてを知っているのだという自分にも分らぬ、そのくせ分ればもっともだと納得するにちがいないらしい、すくなくもそう思われる論理みたいなものが、にょきにょき生えてくる。こんな感じは前にもあった、なんだったっけ？　窓のすぐ外の電柱のビラが、ふと意味あり気に目くばせした。

緑化週間……。

ああ、そうだ、植物だ。

不吉な予感に、コモン君は眼を伏せ、胸がすぼまってゆく感覚を情なく思った。運命……。運命は闘いとらなければならぬ、という文句も、あながち無縁ではなくなった。何事か起らなくてはすまされない。始めて、コモン君は、これからK嬢が届けてくれるはずの生活が、どんなに大切なものであったかをしみじみ感じた。

よし、どんなことがあっても、K嬢をこの男から守らなければならない。

二時五十分。迫ってきた。コモン君は注意深く、道ゆく人々の間に目をそそいだ。代金を数えて机の上に置き、見えたらすぐに飛んでゆくよう身仕度した。しかし外見は何事もなさそうに、落着いていなければならない。コモン君は頭の中で、絶えず目の前の男との間に、丈夫な石の壁

をきずきつづけなければならなかった。なにしろ、あの眼のことを想浮べると、いくら積んでも、積むはじからくずされてゆくような気がしてならないのさ。つとめて見るのをさけはしたがちらついて仕方がない。後向きになっていてさえ相手の勝誇った薄笑いが見え、どうにもならぬ始末なんだ。だから、むろん外を見ていれば安心出来るというわけではなかった。次第に外の動きが激しく思われ、ともすれば意識が遅れがちに思われだした。意識が外界の動きに充分追いついていれば、どんな動きも静止状態に翻訳されてしまうのだが、どうも具合悪い。すべての動きが追いつけないでいる意識の中にぼんやり動きのままの尾を引くんだ。眼がまわる、というのはこんな状態の形容なのだろうか。どこかで、複雑なカット・グラスがぐるぐる廻りながら、光の機械を組合わせているようだ。大小さまざまな自動車やリヤカーや、洋服や足取が、次第に灰色の影になって強い光の層の中に融(と)けてゆく。このめまぐるしい光の楽譜の中からでは、彼女がやってくるのを見分けるのも大変だ。確実な目標になる特徴を想出そうとすればするほど、たよりなく、見はぐらかしそうな気がしてならない。ひょっこり、不意に、店の中に現われている、っていうようなことになるのではないかと、恐ろしくなってきた。それに、益々(ますます)自信を失ったのは、こんな大事なときに、ふと気づいてみると、例の緑化週間のポスターにまじまじと見入っているではないか。

どうしたんだ。きっと疲れたんだ。

思わず空を見上げていた。

そう、空を見上げていたんだ。するすると、天が眼の中へ流れ込む。重い天が、やがて全身に

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com